
緋弾のARIA 魔法の奇跡

ベガF91

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 魔法の奇跡

【Nコード】

N0979S

【作者名】

ベガF91

【あらすじ】

ワルプルギスの夜を倒した鹿目まどか。しかし、光の中に包まれ、アリアのいる世界に…！そしてまどかは東京武偵高校に入学（え！？中学生なのに？）させられ、学園生活が始まる。ちなみに、これは百合です。

これはなにかの始まり？ (前書き)

アリア面白かったわー！って理由ではじめた小説……。しかも百合プレイ……！ほむらのファン、キンジのファンへ、すみません！

これはなにかの始まり？

ワルプルギスの夜を倒した！その後謎の光が私を包み込んだ…！

「うう…」

元の世界に戻った…？目を覚ました私はあたりを見た。…ここどこだろう…？全然知らない場所だった。ここは見滝原町じゃない。なんで知らない場所にいるんだろう…。

ほむらちゃんはどうなったんだろう…。キュウベえも今どうなってるんだろう…。

とりあえず、私はここはどこなのか、人を搜した。でも周りは静かだった。それも夕方だからかな…？

ババババババ

「ひっ！？」

突然の銃声にびっくりして木の後ろに隠れた。

（…なに…？…なんなの…？）

正直、怖い…！一体なにが起きてたのか私にはわからない！いったん静かになったので涙目になりながらそつと様子を見た。

「…」

何も起きてない…。さっきの銃声はなんだったのかな…？確認が終
わったら、人を捜しに…

「伏せて！」

「!？」

誰かが来た。見てみると女の子だった。すると、その子は私を無理
やり地面にしゃがませた。

「…こんなところで危ないわね。あんた、死ぬ気？」

「あ…」

その子の顔が見れた。私と同じピンク色の髪で長いツインテールで、
可愛い…。まるでお人形さんみたいだった…。それとともに拳銃を
2本持っていた。

「あなたは…」

「話は後よ！」

その人の視線を向くとおかしなロボットがいた。…しかもマシンガ
ンみたいなものが…!

「下がってなさい！」

言われたとおりに物陰に隠れた。その子は銃を構え、そのロボット
に立ち向かった。その華麗な銃裁きでロボットを圧倒していた。…
すごい…! あの子何者なんだろ…?

…ここであただけ見てるだけいいのかな？あの子のために…、何かしたい！私は…！

パアア

「な、なに…！？」

ソウルジェムをだし、私は魔法少女になった。

「な、なんなの！？あれ！」

そして、矢をロボットにめがけて放つ！ロボットは破壊された。私は元の姿に戻り、ソウルジェムを指輪に戻す。女の子の方を見ると、啞然とした顔でこちらを見ていた。

「あ…あの…」

「ちょ…、あんた…何者なの！？」

「ふえ…！？」

「突然、衣装が変わって、しかも弓矢一本でロボットを破壊するなんて…！あんた何者なの…！？」

はう…。唐突な質問に私は困った…！でも考えればあんなもの見せられたら誰だってああなるよね…。

「とにかく、来なさい！」

「え!？」

女の子に手を引っ張られ、連れて行かれた。着いた場所はマンションだった。その子の家に入って、さっきの話の続きがはじまった。

「とりあえず、あんたの名前は？」

「私は、鹿目まどか…」

「ふーん、まどかね…。あたしは神崎・H・アリア。東京武偵高校の生徒で専門科目は強襲^{アサルト}科よ」

「えっと…」

「アリアでいいわ」

そこじゃなくて、東京武偵高校？アサルト？私にはよくわかんなかった…。

「それでまどか、さっきのあれなんなのか説明しなさい！」

「あ…あれは…」

見られた以上、嘘は言えない…。魔法少女のことをすべて話した。それを聞いたアリアちゃんは驚いた。

「魔法少女…？でも見た感じだと嘘はいつてはなさそうね。じゃあ、武偵は知ってる？」

「ううん…」

「どこかの異次元世界の子のようね…。それじゃ、武貞のことを教えるわ」

アリアちゃんは私に武貞のことを全部教えてくれた。それを聞いたら恐怖が湧き出てきた。

「そんな怖いことするの…?」

「これも武貞の仕事だから。…(さっきを見たらこの子…使えるわね…!) まどか、あんた、あたしのドレイになりなさい!」

「え!?!」

ど…ドレイ…!?! それって、アリアちゃんの言うことを聞かなくていけないの…? いきなりそんな…。

「ドレイだなんて…、私、料理もできないし、家事もあまりやったこと…」

「とにかく、これは決定事項よ!」

「ふええええん!」

泣く泣く、私はアリアちゃんのドレイになった…。

…こうして、私とアリアちゃん的生活(?)が始まった…

続く

これはなにかの始まり？（後書き）

まだ、原作一巻しか読んでいない件……。てか自分の書いてる小説、まどマギばかりだった……。まどマギ好きすぎて……。（やりすぎた……）

武貞の編入テストそして、武貞高校へ…（前書き）

アリアのホームページをさつき見たら、武貞高校の制服姿の箒が…！！今度はISのホームページ見たらISの制服姿のアリアが…！！あらかじめ言っておきます。この小説は百合ですので。キンジファンみなさんはすみません…。登場予定はありません…。

武貞の編入テストそして、武貞高校へ…

「おきなさい！朝よ！」

「うう…」

窓が眩しい…朝だね…。目を覚ますと見慣れない光景…。そっか、私は昨日、異次元世界に飛ばされてきたんだっけ…？それでアリアちゃんの家泊まらせてもらってるわけだった…。

「武貞高校の編入テストがあるんだから」

「それって必ず合格しないと入れないの？」

「いえ、ランクが付けられるだけ。でも必ずやっておかなきゃいけないの！」

昨日は武貞高校の編入でばたばたしたせいで少し寝不足だった…。アリアちゃんがドレイとして武貞高校に編入しろと強制的にさせられた。専門科目はアリアちゃんと同じ強襲科^{アサルト}。これも強制的にやらされた。

「でも昨日言ってたけどドレイって、グループに入れて意味だね？」

「そうよ！昨日のあんたの戦ってる姿を見て、決めたのよ！」

「そんな無茶な…」

「魔法少女になって試験受ければ一発でSランク確定よ!」

それじゃあ、みんなに魔法少女だってばれちゃうよ…。とりあえず、朝ごはんを食べて、その武貞高校に行った。そして何人かの教官がいて、そこにはテスト用のロボットがあった。

『ほんとにあんな小さい子が、大丈夫かね…』

『見てなさい、あの子はすごいんだから!』

アリアちゃんが教官と一緒に見ていた。そしてさっきのアリアちゃんの言葉を思い出す…

魔法少女になって試験受ければ一発でSランク確定よ!

はう…、魔法少女になって戦っても…いいか。どの道、私はこの世界の人間じゃない…。いっそ、ここで…! アリアちゃんの言葉を信じて、魔法少女になった!

『な…、なんだ!?!』

攻撃をしてくる、テスト用のロボット…。その攻撃をかわしながら、ひとつひとつ、ロボットを破壊していく…。ワルプルギスの夜のように、華麗に戦った。

…そしてテストが終わり、アリアちゃんのいていたとおり、Sランクだった。その後、家に帰り…

「ほんとにSランクに…」

「ね、言ったとおりでしょ？これであたしと同じSランクね！」

「アリアちゃんもSランクなんだ」

「まあね、じゃあ、さっそくこれを…」

渡されたのは、武貞高校の制服と2本の拳銃と小刀…。これをどうしろと…

「制服はともかく、なんで拳銃と小刀が…？」

「学校の規則よ。これを常に携帯しなければならないの！」

「こんなの、怖くて持てないよ…！」

「だめよ、いつ命が狙われてるのかわからないから！」

「そんなこといわれても、拳銃や小刀なんて、私使ったことないし…」

涙目ながらもアリアちゃんに拳銃と小刀を持つのを断ろうとしても、アリアちゃんは…

「確かにあんたの魔法少女の力はすごいわ！でも、それはいざというときの切り札にしなさい！魔法少女で戦ってばかりだと、学校の生徒みんなにばれてあとどうなるか…！」

言われてみれば、学校の全生徒に魔法少女のことをばれてしまえば、

あとあと厄介なことになりそうだ。…ここは言われたとおりにするしかないか…

そして翌日、今日から武貞高校の生徒か…。ちなみに私はアリアちゃんと同じA組だった。

職員室に行き、担任に挨拶をした。

「2年A組担任の高天原ゆとりです」

「鹿目まどかです。これから1年間よろしくお願いします」

「はい、鹿目さん、よろしくね」

高天原先生に案内され、2年A組の教室の前についた。

「では、ここで待っててね」

「はい」

高天原先生は教室に入って行き、私は廊下で待つことに。私が魔法少女であることはアリアちゃんからも秘密にすると約束されたので多分大丈夫だと思った。少し緊張する…、こんなことって初めてだから…。

「鹿目さん、入ってください」

高天原先生の呼び出しに私は意を決して教室の扉を開けて中に入る。2年A組の生徒全員が私の方に視線を向けてきた。

「じゃあ、自己紹介言ってみよっか」

「鹿目まどかです。よろしくお願いします」

私は挨拶をした。すると一部の女子から声が…

『あの子かわいくない?』

『うん、なんか守ってあげたくなるって感じ!』

『ペットにしたい!』

最後なにか危ない一言を聞いたような…。

「神崎さんの隣あいてるから、そこに座って」

「はい」

アリアちゃんの隣か…。席に座り、アリアちゃんと目が合い…。照れ隠しをしたのかアリアちゃんはそっぽを向いた。

「アリアちゃん…」

「学校の案内はしてあげるから」

ぼそっと一言聞こえた。それを聞いて私はうれしくなって…

「うん、これからよろしくね」

「なっ!ドレイの分際でなれなれしく話しかけないでよ!」

…大丈夫かな…？

続く

武貞の編入テストそして、武貞高校へ…（後書き）

白雪「そういえば、私の出番、あるでしょうか？」

あ！

百合のことばかり考えてたら…白雪どうしよ…！

初日の武貞高（前書き）

もう、白雪もまどかLOVEにしようと思った自分…。百
合の小説ですのやりたい放題ですね

初日の武貞高

武貞高初日で私はクラスの人たちがたくさん質問をしてきた（女子ばかり…）

「前の高校どこだったの？」

「み…、見滝原高校（↑もちろん、うそである）」

「そのリボン可愛いね」

「お母さんが選んでくれたの」

「まどちゃん、理子の理想の女の子だよ」

私をまどちゃんといってる子はアリアちゃんと同じくらいの身長で胸も大きく天然パーマの髪をしていた女の子だった。制服もヒラヒラなフリルも付けてた。

「えーと…」

「峰理子だよ。理子って呼んでね」

「うん、理子ちゃん。ところで、アリアちゃんは…」

「あー、アリアはいつもどこか行っちゃうよね」

「あの子さ、友達いないよね。しょっちゅう休んでるし」

「お昼もお弁当1人で食べてたよ。教室の隅っこで」

「そうなんだ…」

なんだか、さみしそう…。アリアちゃんはクラスの人たちとうちとけていないのかな…？

「でも、それに対してまどかは素直でいい子だよね」

「そうそう、アリアの隣の子にしては勿体無いよ」

「理子がコスプレで遊ぶ相手にぴったり」

今なんか理子ちゃんが目を光らせて言ったような…。聞かないことにしよう…。

昼休み、ご飯を買いに購買に行くことにした。それにしてもどこにあるんだろう…。まだこの学校初めてだから購買どこに売ってるのかわからない。あちらこちらあたりを見ていた。

ドン

「きゃ」

誰かとぶつかっちゃった…。

「あ、大丈夫ですか…？」

「は、はい…」

その人は純白のブラウス、臙脂色の襟とスカート、シミひとつない制服を着ていて、とても綺麗な人だった…。

「すみません、購買どこなのか迷ってて…」

「あ、いえ…（か、かわいい…）」

どうしよう…、じいっと…私のこと見てる…。そっか、まだ顔見知りだから緊張してるのかな？ここは自己紹介しておこう。

「私、2年A組の鹿目まどか。今日この学園に編入したの」

「あ、私はB組の星伽白雪」

「隣クラスの人なんだ」

「うん。それで、まどかちゃんは購買さがしてるの？」

「うん」

「1階にあるから…」

「そっか、ありがとう白雪ちゃん」

「あ…うん」

なんでおどおどしてるんだろ…？とにかく、購買をあるところ教えてもらったし、行かなくちゃ

その後、5時間目以降からは専門科目に分かれての自習を行う。私

は強襲科だから同じ専門科目のアリアちゃんに教えてもらおうと思
ったけど、どこにいるんだろう…？ぽつんとどこかへ行っちゃった
…。結局、1人でやることになっちゃったけど、的が全然あたらな
い…。すると周りの人が…

『あの子、今日編入してきた子？』

『どうやらSランクだって』

『あの腕前でSランク？』

『なんで、Sランクなんだろう？』

『教官が間違ってランク付けしちゃったりして』

この高校の生徒たちには私が魔法少女だって秘密にしている。魔法
少女ではなければ、銃の腕前もあまりうまくは無い。

「ねえ、私が教えてあげるよ」

「私も」

「あ、ありがとう」

私は女子たちに銃の使い方を教えてもらった。そしてなんとか的に
当たるようになった。

夕方、家に帰ってみるとまだアリアちゃんは帰ってきたいない。仕
方なく、夕食を買いに行くことにした。前の朝食だって近くのコン
ビニの弁当を食べたくらいだった。料理もうまくないし、毎日コン

ビニの弁当を食べることになるなんて…。

「あ、まどかちゃん」

「白雪ちゃん」

今日の昼休みにあった白雪ちゃんがいた。大きなつつみをもって何してたんだろ…？

「これからどこに行く予定だったの？」

「コンビニのお弁当を買いに行くところだったの」

「そっか…。ねえまどかちゃん、もしよかったら…私の作ったお弁当食べる？」

「いいの!？」

「うん、まどかちゃんのために作ったから…」

最後の言葉はうまく聞き取れなかったけれど、ちょうど近くにあった公園のベンチで白雪ちゃんのお弁当を食べることに。中身を見るとそれはすごく豪華なものだった。えびやらほたてやら私の食べたことが無いものばかりだった。

「すごい…、これ全部作ったの？」

「うん、さっき家に帰ってすぐにつくったから」

「そっか、ありがとう。それじゃあ、いただくね」

さっそく、一口いただくとてもおいしかった。どの料理もしっかり味付けしていてどれもおいしい。

「白雪ちゃん料理うまいんだね」

「そんな…、和食しかつくれないから…（ほんとに…かわいい…！）」

そして、お弁当を全部食べて、ごちそうさまといって、白雪ちゃんにまたお礼を言った。

「本当にありがとう」

「あ、まどかちゃんもありがとう…ありがとうございます」

「なんで白雪ちゃんからお礼を…？」

「まどかちゃんが食べてくれて、お礼を言ったから…」

「ふふ、なんか少し変だよ」

「そうかな…？」

「それじゃあね」

「うん、さよなら」

なんだかいろんな友達ができて嬉しいな…。そんな武貞高の初日の生活は終わった。でも、アリアちゃんはクラスの人たちとまだうち

とけてないのは…。

続く

初日の武貞高（後書き）

2巻の最後らへんを見て、まどかと理子の百合を妄想してしまった
…。

戦姉妹（アミカ）と理子（前書き）

今日から大学ですね…（疲れるわ…）

戦姉妹（アミカ）と理子

家に帰ってきた私は、ソファアに座ってくつろいでいた。まだアリアちゃん帰ってきていないけど、どうしたんだろ…

ガチャ

扉が開く音がした。きつと帰ってきたんだ。お帰りーって言おうとした瞬間、アリアちゃんが誰かをつれてきてる。背は少しだけアリアちゃんより低く、茶髪で私と同じ髪の結び方をしていた。

「あ、アリア先輩、この人は…？」

「この子は、鹿目まどか。わけあって同じ部屋に住んでるの」

「アリアちゃん、その子誰？」

「あたしの戦姉妹^{アミカ}、間宮あかりよ」

「は、はじめまして…」

あかりちゃんは礼儀正しく私にお辞儀をした。

「ええ…と…、戦姉妹^{アミカ}って？」

「先輩と後輩とコンビを組み、一年間指導する制度よ」

そんな制度があるんだ…。あかりちゃんは私のことじいっと見てる…。やっぱり、不自然かな…？

「この際、戦姉妹アミカになったから言っておくけど、まどかは魔法少女よ」

「ええ!？」

何で急にそんなこと教えてるの!? 2人だけの秘密っていったよね?

「大丈夫よ、あかりは戦姉妹アミカだからこれからずっと暮らすのよ。だから、これは3人の秘密よ」

「でも…」

見てみれば、あかりちゃんはすごい驚いた顔をしている。そりゃあ、あんなことを言われたら誰だってそうなるよね…。

「でも…、確かまどか先輩、噂になってました。銃の扱いもそううまくないのに、どうしてSランクか…」

噂になってたんだ…。もうここでいいわけしても遅いよね…。とりあえず、魔法少女のことをすべてあかりちゃんに話した。アリアちゃんも自分のことをすべて話した。

「うわあ、2人のすごい秘密知っちゃったよ!!」

あかりちゃんは目をすごくきらきら光らせていた。そしてアリアちゃんは電話で誰かと話してるけど、何言ってるのかさっぱりわからない…。全部英語だった…。すると、アリアちゃんはなにか木箱を取り出し、その中にあった紙をあかりちゃんに渡す。なにかの設計図かな…?

「まどか、あんたもあかりの手伝いをして。あたしはさっきの件で発注するから、頼んだわ」

ボタン

勝手にどこかへいっちゃった…。さっそく、あかりちゃんの手伝いをすることに…

「え…」

設計図を見ると、全部英語でかかれてた…。せめて日本語版はなかったのかな…？

「あーん…」

「わわ！」

その設計図を食べようとしていたあかりちゃんを止めた

「なんで食べちゃうの？」

「だって、ヤギって…」

「多分ヤギ違いだよ、それ」

「はう…」

ここは設計図のとおりを組み立てることに…。でも全部英語じゃあ、よくわからなかった…。数分後、アリアちゃんが帰ってきた。

「全然進んでないようね」

「設計図が英語ばかりじゃできないよ…。日本語版はないの？」

「ないわ」

即答に言われた…。するとここでメールが来た。理子ちゃんからだった。『今すぐ、ビニールハウスに来て』。…今ここで言われても…。

「ごめん、理子ちゃんに呼ばれたから…」

「はあ…。あかりはあたしが何とかするわ」

すぐに家からでて、ビニールハウスに行った。あまり人は来ないような場所だったけれど…。

「まあーどおーちゃん！」

バラ園で理子ちゃんがいた。アリアちゃんと同じくらいの身長で胸も大きい。そんな理子ちゃんが私になんの用事があるのかな…？

「えっと、何か用があるの？」

「うん、まどちゃんにこれを…」

渡されたのは…。R-15のギャルゲーだった。…これをどうしろと…

「あの…」

「くふふ、それ神ゲーだから、まどちゃんもやってみなよ」

「私、こういうのやったことないから…」

「えー？やったことないの？」

「うん」

「でもねー、理子、まだ15歳だからR-18は…」

「やらないよ！」

ぶっすうーっと膨れっ面されても困るよ…。女の子は普通、こんなゲームしないよね…。

「じゃあ、まどちゃんの好きなこと教えてよ」

「え？」

すると、次第に理子ちゃんの顔がどんどん近くなってきた。それを見て、一步一步後ろにさがる。しかし、壁に当たってしまい、顔もどんどん近くなる一方だった。

「こんな可愛い顔してさ、いじめたいくらいに…」

「り、理子ちゃん…？」

「…ま、これぐらいにしてあげるよ。くふふ、また今度ね、まどか」

「あ…」

今一瞬だけ、呼び捨てされた。…なんだったんだろ…今の…？頭が真っ白になり、家に帰っていった。

「あ、遅かったわね、何してたの？」

「いや、ちょっと…」

「まあいいわ、早くお風呂に入りなさい。あたしたちはとっくに入ってるわ」

「うん…」

さっきのことはもう忘れよ…

続く

戦姉妹（アミカ）と理子（後書き）

少し百合らしくなったかな…？理子のキャラが少し変わった
…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0979s/>

緋弾のARIA 魔法の奇跡

2011年5月12日18時22分発行